

向ヶ岡学寮の 思い出



東京大学向ヶ岡学寮 II寮と物干し竿 1964年8月12日
(写真：東京大学向ヶ岡学寮OB提供)

1949年に生まれ、2003年に54年の長い歴史を閉じた東京大学向ヶ岡学寮は、現在ファカルティハウスが建っている場所に在りました。我々が在寮していた1980年代から1990年代にかけては、寮費が月3500円(1日120円程度)、朝夕食を付けてもプラス15000円(1日500円程度)位で、経済的に恵まれない学生にとって大変有難い施設でした。多くの寮生は、適度なアルバイトと奨学金だけで、仕送りに頼らずに学生生活を送っていました。

建物は古く、1人あたりのスペースも3から6畳と広くはありませんでしたが、娯楽室(テレビ・本・ゲーム類完備)、公衆電話、共同風呂、食堂(横山さんご夫妻がお世話をして下さいました)があり、寮全体がバーのようなもので(ファカルティハウスのバーがこれを引き継いだかどうかは不明です)、充実した寮生活を送ることができました。

寮生達は、学問の天才、スポーツ馬鹿、化石のように学生服で年間を通す人など、思い出しても多種多様な面々ばかりでした。寮生数人が娯楽室に集まれば即席の宴会が始まり、人生問答が過熱しすぎて喧嘩になることもしばしばで、青臭い、しかし、とても貴重な日々でした。寮全体でのメインイベントは寮祭で、1ヶ月前から全員が準備に奔走し、盛大なお祭りを催しました(ときに盛り上がりすぎて、ご近所に迷惑をおかけいたしました。済みません)。

寮の裏手は、動物病院(現動物医療センター)の裏につながっていました。寮の塀をよじ登ると大型動物舎があり、動物たちに大きな声で吠えられながら農学部に抜けることができました。この通称「けもの道」は、寮生のみならず、根津から通う農学部学生さん達の抜道になっていて、毎朝夕かなりの数の方が、向ヶ岡学寮を通じて通学していました。今、この道は、分子細胞生物学研究所からファカルティハウスに通じる道脇の崖に僅かに痕跡を留めるのみで、往事を偲ぶと隔世の感があります。

向ヶ岡学寮は、多感な学生時代を培ってくれた「家」として、我々の心の中にずっと生き続けています。

工学系研究科 機械工学専攻 丸山 茂夫 教授

医学系研究科 国際保健学専攻 渋谷 健司 教授

工学系研究科 バイオエンジニアリング専攻 鄭雄一 教授
(医学系研究科兼任)